立命館大学
日本文学会ニュース No. 19
「論究日本文学」第38号 付録 1974.12

討論に期す

福田晃

学会の数が多過ぎるとの嘆きをよく聞く。日本文学研究の全般を包括する幾つかの学会から、時代別、ジャンル別、その上に隣接の学問の分野の学会まで顔を出せば、どの研究者も十に近い、あるいは十以上の学会に属することになる。たしかにこれでは多過ぎる。出費も大変だしそのエネルギーの消耗もおそろしい。

しかし、学会の多さを難ずる言は、やはりその内実に不満があればこそ出るものとも思われよう。たとえば、どの学会大会へ出席しても、いつも凡その充足感を抱いて帰れるとしたら、おそらくこの嘆きの声は、余り聞かれぬことになろう。しかし、現実はさにあらず。若い研究者の一方的な発表は、ある程度は許されねばならぬにしても、まことに不勉強な緊張度の欠いた発表、それに合わせるようなおざなりの儀礼的な質疑の応酬に至っては、なにをか言わんやである。が、そのような大会の研究発表会が、近年は余りにも目につくのである。講演もよし、シンポジュームも賑やかでよろしいが、やはり大会の眼目は研究発表会にあると思う。されば、発表者にも質問者にも、ある覚悟がなくては、なんの学会、なんの発表会ぞということになる。

本学の日本文学会も、息を吹きかえして三年。多くの学会があれば、大学ごとのそれはもはや必要がないとされる方々もあろう。が、しかし、ここには世間の学会では容易に果し得ぬ、宝の山があるはずである。同じ学び舎を出た者同士なれば、踏み込んだ討論ができるはずだし、それなしでは大会の発表会も月一回の談話会も意義は薄いものになる。勿論、なれ合いは困る。それを戒める厳しさ、つまり覚悟がなければならぬ。

ところで、学科専攻の教授とこれに教えを受けた卒業生の人々とが、徒弟的な関係で繋がっているのが、やはり日本における多くの大学国文学科の実状である。個人的な感想になるが、本学にはこれはないし、あったとしてもきわめて稀薄と断じ得る。わたくしは、日本文学会における踏み込んだ討論こそが、本学専攻の自由の伝統をも保証せしめることになるのであろうとしきりに思うのである。